

第10講 ミケーネ文明の勃興

ミケーネ時代の位置

新石器時代 前6000/5000年ころ—前3600年ころ

オリエントから牧畜・農耕の文化伝播

ギリシアにおける農業の開始

開拓と人口増加

幾何学様式の彩文土器

前期青銅器時代（前期ヘラディック） 前3600年ころ—前2100年ころ

南部ギリシアの発展

巨大遺跡の出現（エウボイア島のマニカ：1x2km）

巨大な公共建造物（ティリンスのルント・バウ、レルナのタイルの家、エギナ島のコロナの白の家など）

土器の特徴

嘴壺（注口器）、ソースボート（舟形ソース入れ）、フライパン型土器、高脚

台付き盃（カリケー）の出現と普及

高速の回転轆轤の使用（EHIII）

前2500年ころの破壊

原ミニュアス式土器の出現

中期青銅器時代（中期ヘラディック） 前2100年ころ—前1600年ころ

遺跡数の減少と人口の縮小

アプシダル・ハウス（壁が薄く建築物としての耐用年数が短い）

ミニュアス式土器（黒色、無地、表面につやあり）

前1650年ころ

竪穴墓やソロス墓の出現

黄色ミニュアス土器

後期青銅器時代（後期ヘラディック：ミケーネ時代） 前1600年ころ—前1050年ころ

各地に宮殿・城塞・館

ソロス墓（ミケーネのアトレウスの墓など）と竪穴墓（ミケーネのAおよびB）

壁画、豊富な黄金製品、水晶細工の盃、ファイヤンスや琥珀のビーズ、象牙細工のプレートなど

宮殿様式の壺、鏡壺、キュリクス、リュトン

活発な牧畜と農耕

対外交易（エンポリオンや植民：ミレトスや南イタリア）

錫の輸入（トスカナ地方？/オリエント/チェコ/コーンウォール地方）

先史時代における人口の極大

前 1250 年ころの変調

地震、キュクローペス式城壁の出現、宮殿内部の倉庫機能の増大

前 1200 年ころのカタストローフと再建

宮殿の破壊

集落パターンの変化

岬近くや丘の周辺に集住

ティリンス：人口 5 万人規模の大都市へ

ダム建設と河道の付け替え

クロノロジー

本土

LH I	1600-1510/1500
LHIIA	1510/1500-1440
LHII B	1440-1390+
LHIIIA1	1390+-1370/1360
LHIIIA2	1370/1360-1340/1330
LHII B	1340/1330-1185-1180
LHIIIC	1185-1065
SMyc.	1065-1015

(P. Warren & V. Hankey, *Aegean Bronze Age Chronology*, Bristol C. P. 1989, Table 3.1. p.169. より)

指標

- 1) 考古学的には・・・堅穴墓・ソロス墓の出現
豪華な副葬品（黄金製品等）
2～3 世代使用
王宮の出現
遺跡数の増加
- } 王朝の出現

↓

このような文明発展に対する従来の説：

アカイア人の侵入と征服（前 1600 年頃）

現在：文化的連続性の強調

黄色ミニュアス式土器：後期ヘラディック期でも制作

堅穴墓の起源：中期ヘラディック期に遡る

- 2) 花粉からは・・・イネ科の雑草

穀物型イネ科 増加→活発な牧畜

ヘラオオバコ 増加→牧畜の活発な活動
ナラ 減少 }
ゲンゲ 増加 } 森林伐採と土地開発の活発化

全体として地中海農業の特徴であるオリーブやブドウの花粉の欠如

今日の地中海地方の風景を特徴付けるマツの欠如

(ダイヤグラムに現れるのは遠方より風によって飛ばされて来たもの)

2) 文献史料によって明らかにされて来たもの

伝承と神話：同時代のものではなく、後世のギリシア人が想像した世界

過去の記憶

ホメロス 『イリアス』・『オデュッセイア』

ヘシオドス 『仕事と日』

粘土板史料

同時代の公文書

行政経済関係

偶然に残存

解読と解釈が必要

依拠するモデルによって歴史家の側の読み込みが行われてしまう可能性